

# トマス・ハーディ詩の徐志摩譯をめぐって

加 藤 阿 幸

## 一 序論

徐志摩の詩 290 篇のうち 112 篇が、英詩における 7 類型の脚韻方式に準じて作られていることをかつて指摘した<sup>①</sup>。また、徐志摩が英詩の中譯を通じて英詩形を白話詩へ採り入れたこと、及び英詩形を系統的に中國白話詩の中に取り入れたのは徐志摩が始めてであることも明らかにした<sup>②</sup>。徐志摩は「均整の中にも流動性のある英詩形」に着眼し、それにより音楽性豊かな白話詩を作り上げることを可能にした。その最初の英詩中譯こそワーズワスの「ルーシー・グレー (Lucy Gray, or, Solitude)」(1800 年発表)であった。このように、徐志摩が英詩形を白話詩の中に導入するきっかけとなったのは、英國が生んだ西洋の偉大なる東洋文學者、アーサー・ウェイリー (Arthur David Waley, 1889. 8. 19-1966. 6. 27) との出会いにある。徐志摩はウェイリーと出会い、ウェイリーの漢詩英譯時の譯詩法から、詩の眞髓の傳達方法を啓蒙させられたのである。ウェイリーは中國の詩を英譯するに当たって、中國古典詩の簡潔さを英詩に伝えるために「横笛の音の美しさ」を持つ「簡潔」な新詩風を生み出していた。徐志摩は英詩中譯に際し、このウェイリーの手法に習ったのである。即ち英詩の眞髓を伝えるため、詩形まで譯詩の中に還元し、そこから「均整の中にも流動性のある」理想的な詩形を見出したのである。

その後、徐志摩は 29 人の外國の詩人による詩 66 篇を翻譯したが<sup>③</sup>、うち 21 篇をトマス・ハーディの詩が占めていた。徐志摩はハーディの多くの詩を翻譯する過程で、韻律を守りながら、いかに詩語の選擇をすべきかを學びとって行ったのではないと思われる。だとすれば徐志摩の修辭法の特徴がかなりの點でハーディ色に染まって行くことも首肯できよう。

以上を踏まえ、本論文では、徐志摩がワーズワスの「ルーシー・グレー」以

降の英詩中譯をどのような手法で翻譯したのかを、トマス・ハーディの譯詩を通して檢證する。その過程で、徐志摩はどのようにして英詩の韻律形式に則しつつ、英詩原文の意味に合致した詩語を選択したのかを考察し、ハーディの徐志摩の作詩法への影響を探ってみたいと思うのである。

## 二 徐志摩のトマス・ハーディの作詩法への言及

徐志摩は1925年7月にトマス・ハーディを訪問したことがある。又ハーディの詩やハーディ自身について、四篇の隨筆を書いている。しかし徐志摩がハーディの詩の技法面について觸れたのは、僅かに以下の2つだけである。即ち一つは徐志摩がハーディを訪問する一年前に書いた一萬六千字餘りの「トマス・ハーディの詩」(《汤麦司哈代的诗》,《东方杂志》21卷,2号,1924年1月25日)の第4節に見られる以下の抽象的な描寫がそうである：

①「ハーディは、春の蠶が絲を吐き繭を作るように、彼の最も微妙で、最も輕やかな、最も愛すべき音樂を抽出し、彼の最も緻密で、最も鮮やかで、最も時間を耐えられる詩歌を紡ぐのである——これはハーディが我々に與えてくれた貴重な贈り物である」(哈代,像春蚕吐丝制茧似的,抽绎他最微妙最轻灵最可爱的音乐,纺织他最慎密最鲜艳最经久的诗歌——这是他献给我们可珍的礼物)

②「彼は“スタンザの變化”(Stanzaic variation)を最も多く試用し、顯著な成功を収めている。彼の作詩上の原則は、詩の中のリズム及び聲調(強弱アクセント)を巧みに利用して、詩の中の感情と表情を描く手法である。」(他诗段的变化「Stanzaic variation」的实验最多,成功亦很显著,他的原则是用诗里内蕴的节奏与声调,状拟诗里所表现的情感与神态。)

また二つ目は1928年3月10日に徐志摩が發表した「トマス・ハーディ」(《汤麦士哈代》《新月》1卷1期)の中の一節「ハーディを尋ねた有る午後(謁見哈代的一个下午)」の以下の描寫がそうである：

①「彼は“我々中國詩では韻を用いるかどうか”と尋ねたので、私は、“我々以前は韻を用いた散文のみ有り、韻を用いない詩はなかったのであったが、しかし最近は……”と言いかけたが、しかし、彼は最近の事など聞きたくなかった様子だった。彼は韻を用いた事に賛成であった。彼は韻の眞價をこのように喩えた<sup>4)</sup>。假に湖心に石を投げたとしよう、水の波紋は圓を描くように擴散していけだろ。韻はちょうどその波紋のようなものであり、無くてはならないものである、と。」（他問我中國詩用韻不。我說我們從前只有韻的散文，沒有無韻的詩，但最近……但他不要聽最近，他贊成用韻，這道理是不错的。你投塊石子到湖心去，一圈圈的水紋蕩漾了開去，韻是波紋，少不得。）

②「私は彼の詩が好きだと言った、なぜならば彼の詩は構成が建築物のように嚴密である上、思想の血脈が流れていて、獨立した有機體のようなものだからだ。私は“Organic”と言う言葉を使った。彼はそれを二回ほど繰り返して言った“Yes, Organic, yes, Organic: A poem ought to be a living thing”」（我說我愛他的詩因為它們不僅結構嚴密像建築，同時有思想的血脈在流走，像有機的整體。我說了Organic這個字；他重複說了兩遍：“Yes, Organic yes, Organic: A poem ought to be a living thing”）

ここで述べているように、徐志摩は彼の詩を好んだ理由を明確に述べている。ハーディの詩には“思想”があると同時に“構成が嚴密”（つまり韻律が嚴格に守られていること）であると言うのである。この言葉は徐志摩の作詩技法の志向が、ハーディの詩の技法と類似していることを如實に代辯している。また、上述した「彼はスターンザの變化を最も多く試験し、顯著な成功を収めている」（一つ目の②）という言葉は、はからずも、後年朱自清が徐志摩の詩を評した次の言葉とほぼ一致している。「徐君は色々な外國の詩形を試みた。彼の才氣はこれらの詩形を巧みに操ることができるから、素晴らしい詩を残してくれたのである（徐先生試驗各種外詩體，他的才氣足以駕馭這些形式，所以成績斐然）」<sup>5)</sup>と。この二つの事實が、徐志摩に及ぼしたハーディの作詩法の影響を如實に語っているのではないだろうか。では、徐志摩は実際にはどのように

翻譯しているのかを次に明らかにしてみる。

### 三 徐志摩が翻譯したトマス・ハーディの詩

徐志摩はトマス・ハーディの詩を 21 篇翻譯しているが、ここでそれらをすべて取り上げる紙幅はない。そこでここではハーディが死ぬ 2 年前、ちょうど 86 歳の誕生日に、自分の人生への回顧として書いた詩を取り上げる。これはハーディの詩の中でも特に重要とされるものである。以下この詩の英文原文と徐志摩の譯詩を比較しながら考察を加える。

(英文) HE NEVER EXPECTED MUCH [or] A Consideration  
[A reflection] on My Eighty-sixth Birthday <sup>(6)</sup>

Well, World, you have kept faith with me, /Kept faith with me ;/Upon the whole  
you have proved to be/Much as you said you were. /Since as a child I used to lie/  
Upon the leaze and watch the sky, /Never, I own, expected I/That life would all  
be fair. //Twas then you said, and since have said, /Times since have said, /In that  
mysterious voice you shed/From clouds and hills around :/ “Many have loved me  
desperately, /Many with smooth serenity, /While some have shown contempt of  
me/Till they dropped underground./“I do not promise overmuch,/Child;overmuch/  
Just neutral-tinted haps and such,”/You said to minds like mine. /Wise warning for  
your credit's sake!/Which I for one failed not to take, /And hence could stem such  
strain and ache/As each year might assign.

(日文譯) 彼は多くを期待しなかった (或いは) 八十六歳の誕生日  
の省察 (内省) <sup>(7)</sup>

さよう、世界よ、君はずうっと私に誠意を盡くしてくれた、/私に誠意を盡く  
してくれた、/全體として君は證明してくれた/君が言ってくれた通りそう  
だった/子供のころから私はずうっと/牧草地に横になり、青空を見凝めるの  
がつねだった/白狀するが、生がすべて公正だろうなどと/期待したことはな  
かった。//その時だった、君が言ったのは、そして言って以来、/言って以  
來何回も/あの神祕に満ちた聲で/周りの雲や丘から君は言った、/「多くの

人が捨て鉢になって私を愛した、／多くの人々がなごやかに明るく愛した、／その間有る者は私への侮蔑を露にした／ずうっと地下に墜ちていくまで。／／「私は過大な約束はしない、／子供よ、過大にな、／まさに中間色の偶然その他など」／君は私のような心の持ち主たちに言った。／君の信用のために賢明な警告だ！／他人はどうしようと私はその警告に注意を払った、／こうして毎年に課せられる／そうした緊張と痛みを抑えることができた。

（中文譯） 八十六岁生日自述

好的，世界，你没有骗我，/你没有冤我，/你说怎么来是怎么来，/你的信用倒真是不坏。/打我是个孩子我常躺/在青草地上对着天望，/说实话我从不曾希冀/人生有多么艳丽。//打头儿你说，你常在说，/你说了又说，/你在那云天里，山林间，/散播你的神秘的语言：/“有多人爱我爱过了火，/有的态度始终是温和，/也有老没有把我瞧起，/到死还是那怪僻。//“我可从不曾过分应承，/孩子；从不过分；/做人红黑是这么回事，”/你要我明白你的意思。/正亏你把话说在头里，/我不踌躇的信定了你，/要不然每年来的烦恼/我怎么支持得了？

この詩の英文の詩形は“iambic Tri & Tetra meter crossrhyme, \*24aaabcccb”であると思われる。つまり、聲調は「弱強調 (iambic)」であり、詩脚構成は3詩脚 (trimeter) と4詩脚 (tetrameter) の混合型 (crossrhyme) である。(但し各連の2行目のリフレインの部分は“dimeter”の2詩脚である) 1, 3, 5, 6, 7行は4詩脚で、4, 8行だけ3詩脚の「42434443」型である。脚韻は“\* 3 aaabcccb”方式である。“\* 3 aaabcccb”方式とは、全部で3連あり、1連は8行あり、押韻方式は“aaabcccb”型であることを言う。つまり各連とも1, 2, 3行は一つの韻で、5, 6, 7行はもう一つの韻、そして、4, 8行が又一つの韻を踏む。このような詩形は伝統的な英詩様式と違い、この詩の内容に合うように彼が創出した詩形と考えられる<sup>(8)</sup>。一方の中國語譯の韻律構成はどうであるか。詩脚構成はやはり英文原文によく似た「42344443」の混合型で、脚韻は「\*aabccdd」の伝統的な“couplet”方式である。かくして、徐志摩の譯詩のプロセスを以下のように考察してみる。

1連の1, 2行目 “Well, World, you have kept faith with me/Kept faith with me”

(さよう、世界よ、君はずうっと私に誠意を盡くしてくれた／私に誠意を盡くしてくれた)は「好的, 世界, 你没有骗我, /你没有冤我(さて、世の中よ、君は私を騙さなかつたね／私を擔がなかつたね)」と譯されている。少々意譯し過ぎる嫌いはあるかもしれないが、これは3連目の“wise warning”(賢明なる警告)と意味上において、前後相呼應するためであると思う。つまり、「あなたの警告した通りになったわね、私を騙さなかつたのね」という風に言っているわけであるから、却って整合性がとれ、かつ流暢な口語體となる。そして2行目のリフレンの部分、「騙」から「冤」に言葉を變えている。「冤」は中國東北の方言でやはり「騙す」と言う意味<sup>(9)</sup>であり、また、「騙 pi à n」と「冤 yu ā n」は、“現代韻”としては押韻させている。これによって單調さが回避され、より優れた音楽性をもたらされるのである。5, 6行目“Since as a child I used to lie/ Upon the leaze and watch the sky”(子供の頃から、私はずうっと／牧草地に横になり、青空を見凝るのがつねだった)の“leaze”はハーディの出身地ドーチェスター(Dorchester)地方の方言で本来「放牧地」という意味<sup>(10)</sup>である。中國語譯は「打我是个孩子我常躺/在青草地里对着天望(私が子供の時、いつも青く茂った草に横たわり／空を眺めていた)」と、“leaze”を「青草」と譯している。「牧草地」の方が正しいが、「青草地」と意譯としてもよいと思われる。ただしハーディの生まれ育った田舎の牧歌的な情景を浮かびあがらせるのには多少困難かもしれない。英文の“to lie upon”は脚韻のため「句跨り」(overline)の技法で2行に分断され、“to lie/upon”となっているので、中國語も忠實に「我常躺在青草地」というところを「我常躺/在青草地」という風に「跨行」の技法を用いている。そのため「躺 t ā ng」と6行目の「望 w à ng」の脚韻が揃い、實に正確に作詩法までが中國語譯の詩に反映されていることになる。

7, 8行目“Never, I own, expected I/That life would all be fair”(白状するが、生がすべて公正だろうなどと／期待したことはなかつた)は「说实话我从不曾希冀/人生有多么艳丽(實を言えば、私だって煌びやかな人生を期待したわけではなかつた)」となっている。ここも又“fair”に對する理解が日本語譯とずれている。もちろん“fair”の意味には「公正」も「煌びやか、素晴らしい」も両方ある。しかし徐志摩が1923年に翻譯した“I look into my glass”という詩の英文版の注釋<sup>(11)</sup>を見ると、ハーディは決して自分の容貌に満足していたわけではない

事が分かる。また徐志摩の「ハーディを尋ねたある午後」の中でも、ハーディの背がことのほか低いと述べられている<sup>(12)</sup>。したがって、ここで「公正」の意味を取る場合、次のような解釈の方が好ましいと考えられる。つまりハーディはその容姿にコンプレックスを抱いていた。そんな自分がいくら頑張ったところで、世間は自分を「公正」に評価をしてくれまい、と。彼は「“公正”にたいして“期待しなかった”」のであり、その意味ではこの部分からは詩人の内心の葛藤と不安を垣間見ることができるのである。これを「煌びやかさ」と取ると、このようなハーディの卑屈さや心的葛藤が全て捨象されることになってしまう。しかし徐志摩がこうした「煌びやかさ」を取ったことは、彼がハーディを非常に崇拜していた<sup>(13)</sup> ことと少なからず関係があるに違いない。彼にとってハーディはそうした負の部分の想起しにくい詩人だったのだろう。こうして分析してみると「公正」と「煌びやかさ」のどちらを取るかは、徐志摩にとってのハーディ像を考える上での一つの鍵となると言えよう。

2 連目の 3, 4 行目 “In that mysterious voice you shed/From clouds and hills around;” (あの神祕に満ちた聲で／周りの雲や丘から君は言った) は「你在那云天里, 山林间/散播你的神秘的語言 (きみは雲の中から、山の木々の間から／あの神祕な言葉を放った)」となっている。ここでは、“shed” は、「散播」と翻譯されている。“shed” の統語的な語義は「光、熱、香りなどを發する」であるから、中國語譯の「散播語言」はきわめて英文原文に近い翻譯であると思う。なぜならば、「散播」は「ばら撒く」や「撒き散らす」の意味であるから、高いところから、言葉があたかも「光や香り」のように“降り注ぐ”のに相應しい語感を與えるからである。また、“shed” の目的語は 1 行目の “you said” の内容であるから、本来ならば、「散播」のあとは、「你所说的話」と續くべき所を、「山林間」の「间 ji a n」と押韻させたいために、「語“言” y á n」にしたと思われる。そして、「言語を發する」という表現を中國語にするには、必然的に「散播」にするしかないので、結果的には、適切且つ詩的に翻譯することができたのである。

7, 8 行目の “While some have shown contempt of me/Till they dropped underground” (その間有る者は私への侮蔑を露にした／ずうっと地下に落ちていくまで) は「也有老没有把我瞧起/到死还是那怪僻 (ずうっと私を輕蔑し續ける人もい

た／死ぬまで、一生その偏屈さが直らなかつた)」となっている。徐志摩が“Till they dropped underground”を「到死」と翻譯したのは絶妙である。「到死」の元來の意味は「死んでも…しない、させない」であり、ここは英文原文の意味である「一生死ぬまで」とも重なって、ちょうど英語と中國語の二カ國語による“相關語”になるわけであり、徐志摩の修辭感覺の鋭さが窺える。また、「怪僻（偏屈さ）」は英文原文にない言葉では有るが、“人生”に對して不逞な態度を取り續ける人間というのは「偏屈」のものであると、徐志摩には思えたのだろうか。しかも、「怪“僻” p i」とすることによって、前の行の「没有把我瞧起」（「瞧不起」が元來の熟語であるのだが）の「起 q i」とも押韻できる。ここでもなんとか韻律を形成しようとするための彼の苦心の跡が見える。

3 連目の 2, 3 行目 “Just neutral-tinted haps and such,” / You said to minds like mine.”（まさに中間色の偶然その他など／君は私のような心の持ち主に言った）は「做人紅黑是这么回事」/ 你要我明白你的意思（人生は所詮はこんなもんさ）／君の気持ちを分ってもらいたいと私にそう言った）」となっている。この 2 行、特に 1 行目は大變わかりにくい部分である。そこでハーディの他の作品を参照する必要がある。實は、2 行目の“neutral-tinted haps”という語と同じ題の詩がある。“NEUTRAL TONES（中間色調）”と“HAP（偶然）”<sup>(14)</sup>である。前者は青春時代の愛の挫折を描いた詩であり、吉川氏によれば、これは「時のずれ、または現在と過去の對比のテーマであり、Hardy の詩を理解する上での大きな鍵となるものである」と言う<sup>(15)</sup>。また後者はハーディの運命論の出発点とされてきた詩であると言われている<sup>(16)</sup>。つまり、“neutral-tinted”と“hap”の二語は、ある種の運命への諦觀を表そうとしたのではないのかと思われる。ハーディは自分の過去の作品名を詩に織り込むことで、自分の表現しようとする内容を凝縮する事ができた。徐志摩はおそらくそれがちょうど中國古典詩の「用典」と同じ手法であることに気づいたに違いない。そのため「中間色の偶然」などと直譯せずに、「做人紅黑是这么回事（人生は所詮はこのようなものであるさ）」と譯したのであろう。また、“neutral-tinted”という英語を「紅黑」という中國語にしたのは、なんとも徐志摩らしい修辭感覺であると思われる。「紅黑」は四川省の方言で「何はともあれ、いずれにせよ」と言う意味<sup>(17)</sup>であり、語義から見て「赤でも、黒でもない、いずれの色であろうとも」という風にも



取れるので、「中間色」とも“感覺的に”通ずる言葉であると思われる。

なお、2行目の“You said to minds like mine”（君は私のような心の持ち主たちに言った）は「你要我明白你的意思（君の気持ちを分ってもらいたいと私にそう言った）」と譯されている。徐志摩はこの簡単な英語を読み違えたとも思えないので、これは「私のような人々にそう告げる」というのを、「そう分かってもらいたい」から、と理解したので、「你要我明白你的意思」と翻譯をしたのではないだろうか。また、そうすることによって、「思 s i」が「事 sh i」と押韻させることができたのである。あるいはこのように脚韻を揃えたいため、このように意譯をしたのだとも見ることができよう。

5, 6行目“Wise warning for your credit's sake!/Which I for one failed not to take”（君の信用のために賢明な警告だ！／他人はどうしようと私はその警告に注意を払った）は「正亏你把话说在头里/我不踌躇的肯定了你（幸いにもちょうど君は事前にそれを言ってくれたから／私は躊躇する事無く君をずうっと信用していた）」というように譯されている。この2行は英文に照らせる言葉はどこも見当たらず、一瞬誤譯ではないかとさえ思われるほどである。しかし、ここでもまた韻律のために、2行とも4詩脚にしたうえに、かつ脚韻を揃えなければならないので、思い切った意譯をしたのではないと思われる。本来ならば、直譯すれば、「这是一个聪明的警告, 为了你的信用/而我也如此地接受了」とでもなるだろうか。しかし、徐志摩は、“for your credit's sake（あなたの信用のために）”を「正亏」（正好+幸亏）という造語に當て、「幸いにもちょうど」と讀ませている。そして、“wise warning”（警告）を直譯せずに、「正亏你把话说在头里（幸いにもちょうど君が事前にそれを私に言ってくれたから）」という風にそれを全體の文の中に溶け込ませたのである。何故ならば、「头里」は「事前に言った」という意味があり、例えば「回头叫顾八奶奶知道了, 我可把话说在头里, 这可是您一个人来的……」（曹禺《日出》第三幕）などのように使われる<sup>(18)</sup>ので、「警告」という言葉こそ用いていないが、「警告」と同じニュアンスになるわけである。ただし、そのために、この句はあたかもありふれた會話の一言のようになり、詩的な情緒を感じさせなくしている嫌いがある。しかし、次の「我不踌躇的肯定了你」で一轉、詩的な雰囲気になったのである。「肯定」の語感が良かったとも言える。ここの「定」は形容詞の結果補語として、「意志が硬く、変わらない

いことを表す」<sup>(19)</sup> 語であり、よく戀人の會話などで「我是跟定了你（もうずっとあなたについて行きますわ）」などのように用いられる。そこでは、何かしら感情の進る様子を感じさせるのである。「信定」は餘り耳慣れない言葉であるが、しかしどこか「一途な、ひたむきな」語感を與える。その雰圍氣が詩的な感覺を與えるのであろう。その上、「里 l i」 と「你 n i」 が押韻しているから、一層詩的な響きを増すのである。かくして、徐志摩はこの2句の意味を損なわずに、見事に格律を守りながら、自分の言葉として再生させたのである。

最後の7, 8行目“*And hence could stem such strain and ache/As each year might assign*”（こうして年毎に課せられる／そうした緊張と痛みを抑えることができた）は「要不然每年来的烦恼/我怎么支持得了（さもなければ毎年来るその悩みを／私はどうして耐えられようか）」と翻譯されている。“*strain and ache*”は本來「緊張（苦勞）と苦痛」と譯すべきところを、「烦恼（悩み）」と譯しているのは、ハーディの深い苦しみを表現損ねているように思える。ここではせめて、「否则每年如何支撑/这些煎熬和折腾（さもなければ毎年どうやって／このようなじりじりと迫ってくる苦痛に耐えろというのだ）」というような激昂した言葉で全編の雰圍氣をドラマチックにひっくり返しても良かったのではないかと思うのである。というのも、ハーディはよく詩の中に小説の一場面を ballad 風に描く傾向があり、この詩全體が軽いタッチで淡々と語ってきたが、しかし人生と言うものは誰にとっても、實際苦勞の連続であることには違いない。それを最後の一言で、やっとハーディが告白したわけであるから、翻譯もそれに併せて言葉を選ぶべきではなかったかと思うわけである。

#### 四 結語

詩を翻譯する事は、不可能であるとしばしば言われる。少なくとも、日本語では言語の構造上、英詩の音樂的な旋律を譯出することは困難であるとされる。その點、中國語の基本的には一字一音一聲調という言語特徴があり、韻律面での譯出に非常に有利なものとなっていると言える。

もっとも原文の韻律を守るためには、時に思い切った意譯もしなければならぬだろう。例えば、徐志摩の場合は、英文を作り變えてから翻譯するという

苦心の跡がしばしば窺える（例えば3連目の2-6行）。

徐志摩がこの詩を翻譯したのは1927年4月20日であり、1926年の春に聞一多たちと「格律詩」を提唱<sup>(20)</sup>してから一年を経て、ちょうど詩形を意識していた時分のはずである。これまで考察してきた通り、この譯詩には韻律を生かすための意譯や詩語の工夫が随所に見られる。しかし、詩形と脚韻に配慮をしながらも、全詩は徹底した口語で書かれ、不自然な翻譯調のところは全く見られない。この詩を翻譯するまで、徐志摩はすでに二百數首作詩ないし譯詩をしていた<sup>(21)</sup>ので、第一首の譯詩の“ルーシー・グレー”より、かなり圓熟味が増したように思う。中國語譯は、英詩原文の風格と詩情が譯出されているほか、詩脚（「42344443」）も英詩（「42434443」）と殆んど同じであり、脚韻もきれいな couplet (aabbccdd) 體である。これが即ちかつて卞之琳が言った“天籟”というものではないだろうか。實は卞之琳がかつて、徐志摩がまだ聞一多との「格律詩」運動を意識的に取り組む前の1924年10月に書いた「消息」という詩を評した時、卞之琳は徐志摩が白話で詩を書きながら、言語そのものの音樂性を表すことができるのは、「天籟」であると語ったことがある<sup>(22)</sup>。徐志摩はこの詩において、正にこの“天籟”を奏でたのではないかと思うのである。

なおハーディの詩の rhyme の特徴の一つとして、よく言われるのが、「頭韻」の多用である。この詩においてもこの特徴が現れている。例えば1連1行目の“*Well, World, with*”、2連1行目の“*said, since, said,*”、5行目の“*Many, me*”、6行目の“*smooth, serenity*”、7行目の“*some, shown*”、3連の4行目の“*minds, mine*”、5行目の“*Wise, warning*”、6行目の“*for, failed*”、7行目の“*stem, such, strain*”、8行目の“*As, assign*”などである。「頭韻」は中國語の「雙聲」にあたると思う。徐志摩のこの譯詩の中では「雙聲」こそは「*语言*」「*躊躇*」の2語しかないが、「疊韻」は、貧韻も含めば「*常躺*」「*地里*」「*希冀*」「*应承*」「*信定*」「*支持*」の計6語も見つけることができる。この譯詩のみならず、徐志摩の詩の音樂性が優れるのは、英詩形に中國古典の「雙聲」「疊韻」を鏤めたからであるとかつて論じたことがあるが<sup>(23)</sup>、この譯詩のなかにも、正に、その特徴が現れているのである。これも英詩の、とりわけハーディの作詩法の影響と見ることができるのではないだろうか。

また、徐志摩は押韻のため、方言をも取り入れている（1連2行目の「*冤*」、

「头里」)。或いは、例えば「紅黒」のような方言を用いて、英語の“neutral-tinted haps”と意味上の「相關語」を作り、ハーディの詩行に凝縮された心情を適切に表している。更に、韻を踏むため、原詩には無い語彙（「怪僻」）を入れて意譯し、流麗な響きを作り出している。

以上見てきたように、徐志摩はこの詩を翻譯する時、英文原詩の詩情を保ちつつも、作詩法の面では①ハーディの詩と同じ口語の文體を用いて、隨所に方言を取り入れ、②英詩の「頭韻」と同じ音聲的效果を與える「雙聲」「疊韻」を多用し、③且つ原詩と同じ詩形まで譯出しようとしていたことが分かる。

徐志摩はハーディの詩の翻譯を通して、作詩法を學び、その過程で、生來の“天籟”の音樂的な素質に目覺め、ついには獨自の詩形を作り上げた。すなわち、新月詩人が風刺されていたような「豆腐干型」の四角い詩と一味違っていた詩形—「均整のなかにも流動性のある」詩形に、中國古典の韻律を併用した「中西融和」の詩歌音樂美を會得したと言えるのである。

注

- (1) 《徐志摩詩歌的浪漫性和音樂性》(遼寧大學出版社, 1993) p. 160-164
- (2) 「徐志摩とアーサー・ウェイル」《東瀛求索》8号, 中國社會科學研究會, 1996年)
- (3) 『徐志摩詩全集』(顧永棣編注, 學林出版社, 1992年)による。
- (4) 「... 但他不要听最近, 他赞成用韵, 这道理是不错的」は本來ならば、「しかし彼は最近のことなど聞きたくなかった、彼は韻を用いる事が賛成である。確かにそうである。」と「这道理是不错的」を「確かにそうである」いうふうに徐志摩の言葉として翻譯すべきところであるが、しかし、そうすれば、次の言葉「你投块石子到湖心里去, 一圈圈的水纹荡漾了开去, 韵是波纹, 少不得」も徐志摩自身の言葉となってしまう。ハーディの詩は必ず韻を踏むことが、ハーディの詩の大きな特徴であり、徐志摩もそれにむしろ自分の作詩理念と合い、ハーディの詩を21首も翻譯したわけであるから、この文は文の流れから見て、徐志摩はハーディも押韻することが必要である事を強調するために述べているのであると見る。そのために、「这道理是不错的」以下をハーディの言葉としたわけである。
- (5) 『新詩雜話』(香港、港青出版社、1978) p. 97。
- (6) “THOMAS HARDY, A CRITICAL SELECTION OF HIS FINEST POETRY” (Oxford University Press, 1984) p. 452による。
- (7) 本稿における英文の日本語譯は全て『ハーディ詩集』(大貫三郎譯編、思潮社、1997)による(本注の英文引用文除外)。なお中國語譯を日本語に直したものは全て筆者による。
- (8) ハーディの詩形様式は多様であるとよく言われる。本文注(6)詩集編集者であるSamuel Hynesも詩集の“INTRODUCTION”の中に、かつて、W. H. Audenがハーディの詩を評して、「イギリスの詩人、例えばダントとカブラウニングでさえ、これほど多く

の、これほど複雑な stanza 形式を使っていなかった (... no English poet, not even Donne or Browning, employed so much and so complicated stanza forms) (p. xxx) と言ったと書いている。

- (9) 『中国民間方言辞典』(南海出版公司、1994) p. 633
- (10) 『ハーディ小辞典』(深澤俊編、研究社出版、1993) p. 162
- (11) 本文注(4)の英書の p. 506 の “I look into my glass” という詩への注釋によると、次のように書いている。

“I look into my glass” はハーディが 1892 年 12 月旅の途中で書いた詩である。なお『晩年のハーディ』13-14 ページでは次のような記述がある：「私は鏡を覗き込んだ。そして若い時からのこの軀體のぶざまで、惨めさを覚え、また親の最も良い所を貰ったとしても、少しも私をより格好よくはさせてくれまいと言う悲しい事實を覚える... なぜ人の精神は、自分の體のような、當てにならない物體とこれほどにも近くて、悲しい、衝撃的で、不可解な關係に陥らなければならないのか！」(I look in the glass. 'In December 1892 Hardy wrote in his journal: 'I look in the glass. Am conscious of the humiliating sorriness of my earthly tabernacle, and of the sad fact that the best of parents could do no better for me ... Why should a man's mind have been thrown into such close, sad, sensational, inexplicable relations with such a precarious object as his own body!') (LY, pp. 13-4)
- “LY”とは Florence Emily Hardy (ハーディの再婚した妻) が書いた “The Later Years Of Thomas Hardy” (London Express, 1930) のことである。
- (12) 原文は「我的印象是他是一个矮极了的小老头儿」(『徐志摩全集・散文集(甲)』商務印書館、1983) p. 96
- (13) 徐志摩は「ハーディを尋ねたある午後(谒见哈代的一个下午)」の中に「私は“英雄崇拜”者であることを敢えて認めよう。山、人は誰でも高い方を登りたいと願っている。人間だって、大きい方に近づきたいのは人情であろう(我不讳我的“英雄崇拜”。山, 我们爱踮高的; 人, 我们为什么不乐意接近大的?)。」と述べている。
- (14) “Neutral Tones” も “Hap” も初めての詩集 “Wessex Poems and Other Verses” (1989) に所収されている。
- (15) 吉川道夫『言語的テクニクから見たトマス・ハーディの詩』(篠崎書林、1991年) p. 520
- (16) 本文注(15) 所掲書 p. 424 より
- (17) 『成都話方言辞典』(羅韻希他 8 名編著、四川省社會科學院出版社、1987年)
- (18) 『汉语大辞典』上海辞书出版社 1986 年 12 卷、p. 308
- (19) 『現代漢語八百詞』呂淑湘、商務印書館(香港) 1991 年、第 4 次印刷、p. 150
- (20) 「格律詩」運動の發端は、聞一多が 1926.5.30 付けで當時徐志摩が主幹をしている「晨报・副刊」に「詩的格律」を發表し、現代詩に格律が必要であると論じたことから、主に「詩鵝」に投稿をしていた詩人たちと新月派の詩人たちが呼應し、ついに新詩壇に一大ブームを起こしたのである。
- (21) 本文注(3) 所掲書の目録を参照されたい。
- (22) 原文は「这样基本用白话写诗而能显出这个特点, 最关键所在, 连徐志摩自己最初并没意识到, 所以说也可谓是出于“天籁”」(『徐志摩诗选』人民文学出版社、1983、卞之琳の序文より)
- (23) 本文注(1) 所掲書の第三章第二節を参照されたい。